

"Rewrite" ep. 11 (another)

"Knockin' on Heaven's Door"

小鳥のアトリエを探して森を彷徨う鳳ちはやの目の前に、彼女は倒れていた。

まともな人間なら、確実に死んでいる傷だ。それは取りも直さず、目の前で倒れている反りの合わない同級生——此花ルチアが、まともな人間なんかではないことを端的に示していた。

（——私も同じか）

どうしよう、助けなくちゃ、その焦燥の裏側で、鳳ちはやは、ほんの一瞬だけ、そんなことを思った。

@

@

@

そして、小鳥のアトリエに集ったオカルト研究会の誰もが、此花ルチアは死んだ、そう思ったとき。

『鍵』……!?!?』

此花ルチアの前に力なく座り込んだ神戸小鳥の前に、それは差し出されていた。『鍵』の異次元の色彩のリボン。その先端が、「これを使え」とでも言うかのように——。

@

@

@

翌朝にはもう、此花ルチアの傷は、すっかり治ってしまっていた。

いくら次元圧縮した人工生体基盤を擁するガーディアンの生物兵器といえども、常識では考えられないことだった。そして。

「わかった、私にも手伝わせてくれ」

何の迷いもなく、此花ルチアはそう言った。

「え……いいのか？」

「何がだ」

そう問い返されて、天王寺瑚太郎は言葉を失った。

「だって、その……ガーディアンは、鍵を……」

「殺す、と云いたいのか？」

こくりと、天王寺瑚太郎は頷く。

「勘違いしないでくれ。ガーディアンは意味もなく何かを害するような組織ではないんだ。

たとえそれが、人類を滅ぼしかねない力を持っている存在であったとしても……」
ちらり、と此花ルチアは鳳ちはやに視線をやった。
「それを利用して、人類を滅ぼそうとする組織の人間であつてもな」

@

@

@

秋も深まって、夜の風が吹き抜ければ、寒い。

風呂上がりだが、油断していれば湯冷めする。

鳳ちはやは、ほんの少しだけ迷ってから、ストールを羽織った。

小鳥の森の結界の中でも、どうやら虫たちは特に不自由なく生活をしているようだ。

りり……りりり……と辺り一面から声が出た。

その草むらを一筋走る獣道に、鳳ちはやは足を踏み出した。

ざり、とサンダルと小石が擦れる音がする。

しっかりとした高い木の太い枝に、その手に超振動ブレードを掲げて、此花ルチアは優雅

に腰を下ろしていた。哨戒なのだろう。

その身体に内蔵された人工生体基盤が、如何なる能力を秘めているのか、鳳ちはやはまだ知らない。単独行動する戦闘機能は、力の全てを晒さない。己の「包帯」だってそうだ。

「此花さん、もう大丈夫なんですか」

「ああ、すっかり元気だ。心配をかけたな」

「ひどい傷でしたから」

「そうか、鳳さんが私を運んでくれたんだったな」

にこり、と此花ルチアは微笑んだ。

鳳ちはやの心臓が、その笑顔に、どくりと跳ねた。

夜空は晴れ渡っていて、その向こうにぼつかりと月が浮かんでいる。

月の光が、地平線の山影まで続いている森を、照らしていた。

「……改めて、感謝する。ありがとう」

「どういたしまして」

どうしても、言葉が素っ気なくなつた。

「まあ……」

今度は、苦笑いだつた。

「仲良くしよう、とは言わないけどな」

言うのと、ちらりと眼下のアトリエを見た。

そこには、主たる神戸小鳥と、天王寺瑚太郎と、そしてあの「鍵」が眠っているはずだつた。

「一旦休戦は本当だ。それは信じて欲しい」

「いったん、ですか？」

「そういう意味じゃない……」

此花ルチアは困つたような声を出した。

「また敵になるかも知れないとか、そういうことじゃない。心配なら、ちゃんと言うけどな。」

鳳さん、ああ、神戸さんも、会長殿もそうだが、みんな、仲間だ。敵じゃない」

「ずっと、ですか？」

「ああ」

天王寺瑚太朗についての言及がないのは、鳳ちはやは気にしないことにした。単に眼中にないだけだろう。

「此花さん」

「なんだ？」

休戦の承諾だと思ったのだろう。此花ルチアは、穏やかにそう問い返してくれた。

鳳ちはやは、言った。

「あなたは、誰ですか？」

@

@

@

小鳥のアトリエに奇妙に非対称な緊張が走っていた。

「委員長、一体……」

天王寺瑚太朗の言葉が困惑のまま宙に消え、此花ルチアが力なく首を振った。

「私にも、何が何だか分からない。ただ、鳳さんが……」

鳳ちはやは、いつもとほとんど変わらない不機嫌そうな顔で、いつもとほとんど変わらない不機嫌そうな距離を取って、此花ルチアの横に立っていた。そして、いつもとほとんど変わらない不機嫌そうな――しかし、いつもと違う致命的にフラットな声で、言った。

「此花さん、あなたは、誰ですか？」

「……こればかりなんだ。さっきから」

「ルチア、心当たりはあるのか」と静流が問うが、

「すまないが」ちらり、とちはやに視線をやり「……全くない」

また、沈黙が流れた。

アトリエの隅の『鍵』の異次元の色彩のリボンが、ゆらゆらと揺れているばかりだ。

「ちはや、何かあるのはわかった。だけど、もう少し説明できないのか」

「……」

「話をしないと、誤解も解けな……」

「誤解じゃありません」

ちはやが遮り、言い切った。議論の余地がない。

「悪かった、誤解じゃなくて……委員長がその……」ルチアと瑚太朗の視線が交差した。

「——誰なのか、教えてくれないか」

「……此花さんは此花さんですよ」

「それじゃあ」

「でも……だって、おかしいと思わないんですか」

「何が」

「此花さんが、こんなに簡単に……」

一瞬言いよどみ——しかし、鳳ちはやは、此花ルチアをまっすぐに見据えて、言い切った。

「自分の正しさを捨ててしまうなんて——そんな都合のいいことが、あるはずないじゃないですか」

「な……!？」

鳳ちはやの言葉に、此花ルチアは、瞬時に頭に血が上ったようだった——が、次の瞬間、紅潮した顔がすっと青ざめた。その言葉の意味を理解して、納得してしまったのだ。

その緊張の外側で、びくり、と小鳥が肩を震わせた——のに気づいたのは、しかし、小鳥のほかに、ただ一人、鳳ちはやだけだった。

@

@

@

なにかがおかしい——それが一体何なのか、何故なのか、どうしたらいいのか、それはまるで分からないが、しかし、確実に。

それが、誰もの共通認識だった。

此花ルチア自身も、己の『転向』が、普通ではないことを、悟ってしまった。だって、此花ルチアは、そのような融通の利く人間ではない。

頭で考えれば、今すぐあの『鍵』を始末してしまえば——可能かどうかは別として、そう試みるべきだ。だが、全く不可解なことに、どうしてもそういう気持ちになれない。そもそも、そのような「気持ち」で判断するようなことが、ガーディアンの特異戦力たる此花ルチアとしては、あり得ないことなのではないか。

そんなルチアを、中津静流が真顔で心配をした。その様子を見て、鳳ちはやは、自分が謀られていたわけではない、ことだけは、ようやく理解した。

故にこそ、できることは何も無いことになる。

とにかく、その場は散会となった。

夜も遅かったから、仕方がなかったのだ。

しかし――

@

@

@

――その数時間後。

@

@

@

突如突き上げる振動が、瞬時に小鳥のアトリエを粉碎し、一拍おいて、バラバラになって吹っ飛んだ木材や家具が、地面に降り注ぐ激しい音がした。

そして、あとに残った瓦礫の山を吹き飛ばし、そこから現れた包帯の繭のごときもの――

「――まったく無粋ですね、お嬢様ともあろうものが」
繭がするするとほどこけ、中から現れたのは、瑚太郎、小鳥、静流、ルチア、ちはや、そして、それらを片手で軽々と抱えた――

「——鳳咲夜ともあろうものが、この程度、の襲撃を防げないわけでもないでしょう？」
艶然と微笑んだのは、蛸と蜘蛛の合いの子の如き巨大な怪物、クリボイログの背に乗った
ガイアの首領、千里朱音だった。

「朱音さんッ！」

鳳咲夜の肩の上で、鳳ちはやが叫んだ。

「『鍵』の気配がない——ちはや。『鍵』はどこかしら？」

「知りませんッ！」

@

@

@

戦況は、拮抗している——かに見えた。

@

@

@

己の致命的に暴力的に破壊的な一撃が、クリボイログを屠った——と、鳳咲夜は思ったか

も知れない。それが徒になった。

「——！！」

鳳咲夜の目に、にたり、と嗤う千里朱音が映った。

しまった、と思うのと、恐らくは同時だっただろう。

ジャキン——！！

鋭く巨大なものが激しく噛み合わされる音がした。

巨大な鋏が、そのかたちをした植物——であろうものが、突如出現していた。

地上から歪に突き出したその刃は、既に噛み合わされていた。

鳳咲夜と鳳ちはやを繋ぐ見えないアウロラの糸を、真つ二つにするように——

瞬時に、鳳ちはやは魔術的な支えを失った。必然の帰結として、空中から真つ逆さまに落

下した鳳ちはやは、無惨に地面に墜落——

死を覚悟した鳳ちはやの身体が地面に触れる寸前——紫の暴風がそれを浚った。

「此花さん！？」

「舌を噛むぞ！」

@ @ @

ガイアとドルイドの戦闘は——いや、それは結局、戦闘と言えるような種類のものでもなかった。それは、一方的な、完膚なきまでの蹂躪だった。鳳咲夜、ガイア最強の魔物のみならず、『鍵』の本質をも奪われた。神戸小鳥の手にある『鍵』はすでに、完全な抜け殻だった。

中津静流は、ガーディアン極東教区・日本支部とコンタクトしていた。カイチヨを止めることができるのは、それでもガーディアンだけだ。手加減は難しい。いざとなれば、カイチヨを手にかけることもある。いや、そのチャンスがあるなら、やるのだ。中津静流は腹を括った。腹を括らせるのに、己の薬剤を少なからずつぎ込んだとしても、それをする程度の覚悟はあった。

一方で神戸小鳥は、完全に生気を失って、ベッドに横たわっていた。『鍵』を奪われた。最早神戸小鳥に為すべきことは、この世界にただのひとつも残っていないかった。少なくとも、そう思うことができた。それはある意味で、幸せなことかも知れない——と、天王寺瑚太郎は思った。しかし。

15 天王寺瑚太郎は、それでも、状況を冷静に観察しようと、己の心を砕いていた。神戸小鳥

の、これが終着点なのか？　これがエンディングだとも言うのか？　そんなことを、天王寺瑚太郎は認められなかった。彼女が文字通りに命を賭けて、命を削って紡いできた道の先に、もっとマシな、願わくは幸せな場所がないのか。いや、なくてはならない。そのために、天王寺瑚太郎は己に冷静さを強いた。小鳥が倒れた今、俺にそれができなければ、誰ができるというのだ。

そんなことばかりを考えていたから、此花ルチアの『異変』のことを口にするものは、誰もいなかった。誰もがそれを忘れてしまった——ように、見えただろう。

@

@

@

「小鳥」

「……」

「私は、それでいいと思っています」

それが問いかけだと、神戸小鳥には分かっていた。神戸小鳥は、僅かに身じろぎをした。

「此花さんのところに行きます」

答えはなかった。

@

@

@

「なあ、鳳さん。私は一体、誰なんだろうな」
ほとんど永遠とも思われるような沈黙のあと、ぽつり、と。
此花ルチアはそう言った。

あの場面で、私は、鍵を殺すべきだった。

さもなければ、せめて、千里朱音を殺すべきだった。

鳳ちはやにかまけているような場合ではなかった。

人類世界の運命がかかっているのだ。

ガーディアンの優秀なる駒として、人類への奉仕者として、此花ルチアは、そうすべきだったし、事実そのような行動を取るものだった。

本当はそのはずなのだ。

それなのに。

「……知りませんよ、そんなこと」

鳳ちはやは、それだけを言った。

もちろん、そんなはずはない。

鳳ちはやは、ガイアの魔物使いだ。

得意ではないとはいえども、魔物の作り方だって知っている。

もちろん、神戸小鳥が『鍵』の欠片をつかって、此花ルチアにしたことが、一体どんなことなのかだって、分かっている。

此花ルチアが、神戸小鳥に都合のいいように動いている理由だって、もう分かっているのだ。

自分にとって都合のいいように動いているのが、その結果に過ぎないということもだが。

その『結果』は、確かにある。ここにあったのだ。そうなら、それならば――

「――いいじゃないですか。仲良くできるなら、その方がいいです」

「そんなものかな」

「そうやって軽く流すのだって、以前の此花ルチアならあり得ないことだ。」

「そんなものですよ」

にこりと、鳳ちはやは笑ってみせて。

それからちらりと、己の手に巻かれた包帯——咲夜のかけらをそっと撫でた。

此花さんのことを言うなら、自分だって、咲夜の力を得て、何も変わらなかったと言えるのか？ しかもそれは、最強と言われる魔物の欠片なのだ。

だから——。

此花さんが、今の此花さんが、こうある理由、そんなものはどうでもいいと思った。

高い樹の枝にふたりで腰掛けていると、陽が沈んだ雲ひとつない空が青く昏く暮れていくのがよくわかる。

そして、東の空か、満月が昇ってきていた。

「月が綺麗だな」

此花ルチアのその言葉を聞いて、にこり、と鳳ちはやは笑った。

その言葉の意味を、敢えて問い返すこともせず。

あとがき

お世話になっております。鶏卵工房の瀧川新惟です。色々あつて一年ぶりの新刊、Rewrite 同人誌としては二年ぶりになります。Rewrite というのは、本当に底が知れない作品ですね。まだまだ、向き合わなきゃならないことが、たくさん眠っていそうです。

ところで本作は、弊サークルの三番目の Rewrite 同人誌ですが、時間軸としては最も手前にあるもので、概ね以下のような位置づけのイメージで書いています。

拾壹話：Knockin' on Heaven's Door

拾貳話：G線上的アリア

〔終末は巡る黄金の秋〕所収

最終話：たったひとつの冴えたやり方

(〃)

TV-SP：彼方の待ち人

(〃)

劇場版：You are the earth, I am your moon. (「神戸小鳥の旅路」所収)

通読してみると、個人的には大変好み話になっていて、まーそりゃ自分で書いてんだからそーだよなって話ですが……やっぱり同人誌って最高ですね！

さて、少しでも小鳥シナリオの話をお願いします。

小鳥シナリオは、端的に表現すると、「俺は魔物か？」という疑惑に、天王寺瑚太朗が気づいていくプロセスに他なりません。リーフバード、ちびもす、小鳥の両親——順を追って、丁寧、天王寺瑚太朗が魔物である可能性が示されていきます。両親が銃を手に取り、瑚太朗と小鳥を守るシーンなんて、感動的な演出ですけど、致命的に絶望的なシーンですよ。

一方で、アニメ版の十一話では、神戸小鳥が、鍵の力で、此花ルチアの傷を治す、という展開がありました。いやいやいや。それをそんなに簡単にやっちゃうか？ それは、此花ルチアを魔物にしかねない行為だぞ……？

ということ、ちはルチ風味ではありますが、この本は本質的には、こたことなんだ、と僕は思っているわけです。個人的には、それがどんなカタチであろうとも、敢えて言うならば構わない。無料を承知で、瑚太朗と小鳥には、幸せになって欲しいのですよね。

さて、丁度これを書いている今日、2021年の夏コミ延期が発表されました。そうすると、次に本を出せるのは、きっとKey Island 6ですね。まーなんとか頑張ります次第、なにとぞご支援くださるよう、お願いいたします所存です。押忍。

二〇二〇年三月十四日

瀧川 新惟

鶏卵文庫

"Rewrite" ep. 11 (another)
"Knockin' on Heaven's Door"

2021年3月14日 初版第一刷発行

- 著者 瀧川新惟
- 原作 Key/Visual Art's
- 製作 サークル鶏卵工房

発行人：瀧川新惟

a.takigawa@lostwinter.info

発行元：サークル鶏卵工房

<http://lostwinter.info/>

印刷所：株式会社ポプルス

<http://www.inv.co.jp/~popls/>

